

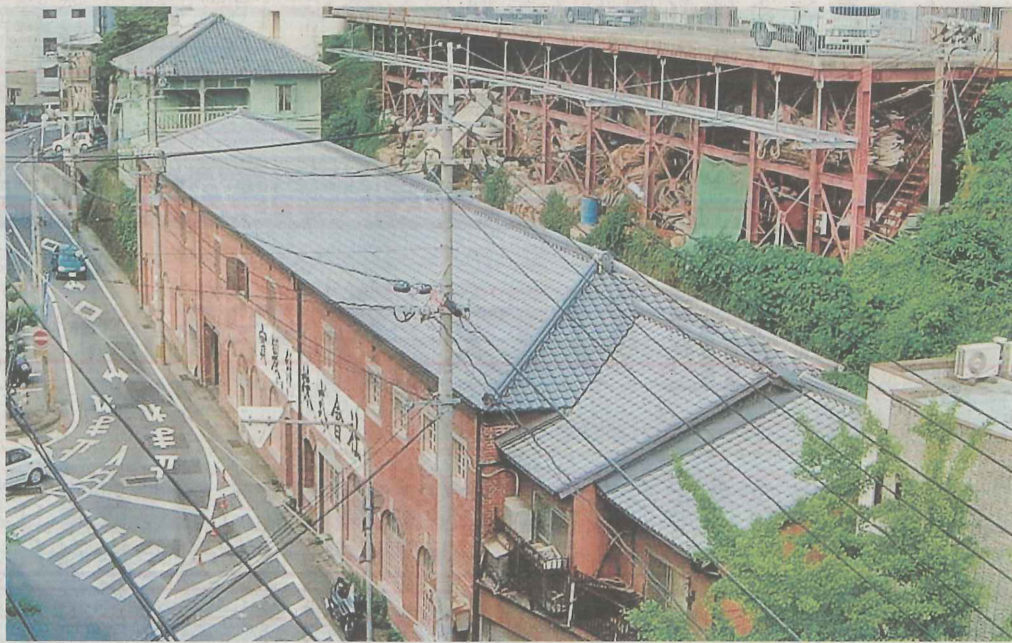
数奇な運命たどった建造物

最後のレンガ造り倉庫

長崎居留地
ドキュメント
ブライアン・バークガフニ

16

長崎市松が枝町南部の通りを歩いていると、居留地時代の大きなレンガ造り倉庫が目に入る。この場所は、江戸時代から馬小屋が立ち並んでいたが、長崎居留地



バンザイ清涼飲料水会社が開設されたレンガ造り倉庫と隣接する旧南山手乙9番地の洋風住宅。(筆者撮影)

「バンザイ」炭酸飲料を製造

を一望できる風光明媚な場所だった。

英字新聞「ナガサキ・プレス」の明治31(1898)年3月31日号には、「貴重な井戸と数件の馬小屋などを含む」という下り松44番地の売却広告が掲載され、それまで馬小屋のままで利用されていたことがうかがえる。借地権をこの時点で獲得したのは、日本郵船会社のイギリス人元船長ロバート・N・ウォーカーである。

ウォーカーは当時、大きな波乱を経験していた。明治7(1874)年から三菱社、後に日本郵船会社に船長として勤務し、日本人の妻サトとの間に9人の子供をもうけたが、指揮を執っていた高千穂丸が同25(1892)年に対馬の海



晩年のロバート・ウォーカー二世(筆者蔵)

岸で遭難すると、日本郵船会社を退社し、家族とともに故郷メリーポートに戻った。イギリス滞在中に愛妻サトが36歳の若さで急逝し、彼は子供たちを連れて長崎に戻り、寄港する外国船にさまざまなサービスを

提供する「R・N・ウォーカー商会」を設立した。長崎に戻ったウォーカーは、南山手乙9番地の2階建て洋風住宅(現存)に居住し、長崎が国際貿易港として全盛期を迎える中で

栄華を極めた。貨物や蒸気船の乗客の個人的な荷物を一時的に保管するために、隣接する下り松44番地に大きな倉庫を建設した。赤レンガ造りの長方形の建物は明治35(1902)年に完成したが、翌々年に勃発した日露戦争によっ

て使われなくなった。建物を活用するために、ウォーカーは居留地のオークションで炭酸飲料製造機一式を購入し、建物内に「バンザイ清涼飲料水会社」を開設した。「バンザイ」を社名に選んだ理由は、この言葉が日本の戦勝祝いに参加する在日外国人の間で流行するようになったからである。

その4年後、ウォーカーは自社の経営権を次男のロバート二世に譲り、未婚の娘たちを連れてカナダに移住した。バンザイ清涼飲料水会社の工場は、大正8(1919)年に閉鎖されるまで、ジンジャーエールなどで炭酸飲料を独自のラムネ瓶で生産し続けた。

同14(1925)年、ロバート二世は工場の機材とレンガ造り倉庫を売りに出し、翌年、長崎の実業家中部悦良に売却した。この取引により、居留地時代の借地権が抹消された。その後、倉庫は大日本製氷、日本食料工業、日本水産、三菱重工業などの手に渡り数奇な運命をたどった。昭和28(1953)年、大阪の前岡製綱社が建物を購入して子会社として「製綱株式会社」を開設し、今に至る。

現在、築122年のレンガ造り倉庫は、かつての長崎居留地の面影を残す貴重な歴史的建造物として、松が枝町の現地にたたずんでいる。

(グラバー園名誉園長)

月1回掲載します



「BANZAI」という文字が浮き出しにされた、バンザイ清涼飲料水会社の「ラムネ瓶」(グラバー園蔵)